

# キューバン・ディアスポラ

## —在米キューバ人の表象に関する考察—

田 沼 幸 子

### 要 約

キューバ革命後の人的移動は、在米キューバ人によって、革命からの政治的な避難を含意する「亡命」という語を用いて表象されてきた。「亡命」という語の選択には、彼らの移動は、経済的上昇を求めて自主的に移動する「移民」とは違って望まれなかったものであり、じきに帰国することを望んでいるのだという主張が含まれていた。しかし近年、キューバ人の出国の動機や階層、政治経済的状况などが多様化するにつれ、このように二項対立的に意味づけされてきた「移民」と「亡命」という概念を用いることの限界が指摘されるようになってきた。以上のような経緯から、様々な動機や背景の在外キューバ人を総括して「ディアスポラ」として表象できるようになったことは、キューバに関する人類学的研究において新しい認識のあり方を可能にしたといえる。

キーワード：ディアスポラ、移民、亡命者、キューバ、ネーション

## I 問題の所在と背景

### 1 はじめに

1959年のキューバ革命<sup>1)</sup>以降、多くの人びとがキューバから米国に移住した。彼らは、米国ではキューバ系アメリカ人 (Cuban Americans) と呼ばれ、渡米後、短期間で政治的・経済的な順応を果たした移民集団として知られる。しかし、当のキューバ系アメリカ人は、その呼び名どころか、「移民」としての成功にさえ、とまどいを示してきた。革命直後に米国に渡ったキューバ人の多くは、移住をフィデル・カストロが失脚するまでの一時的な避難だと考えていた。帰還を望む彼らは、自らを「亡命者」と見なしていたため、米国に住み続けることも順応することも望ましくないこととして捉えていたのである (Portes, 1969)。こうした背景のため、幼少時にキューバから渡米した人類学者ペハーは、在米キューバ人 (Cubans in the United States) を含めてキューバを題材とした講義を考えると、その題目を何とすべきかとまどう。『キューバとその亡命者たち』 (Cuba and Its Exiles) という題名を考えたものの、自分たちを今も「亡命者」と呼ぶことに違和感をおぼえるのだ。

100万人いる在米キューバ人は、まだ亡命者と見なせるのだろうか。ここ〔米国〕で人生をやり直した、他の故国を追われた人々 (displaced people) と、本当にそれほど違いがあるのだら

うか。彼ら、少なくともその子供たちは、カストロ主義 (Castroism) が37年にも及び、キューバに帰還する希望が一層薄れたなか、もはや移民になったといえるのではないか…それどころか、デイビッド・リエフが言うように、単なる米国人になったのではないか (Behar, 1996: 143-144)。

米国人ジャーナリストのリエフは、マイアミ在住のキューバ人がすでに長期間、米国に順応して生活しているにもかかわらず、自らの置かれた状況を「亡命」と見なしていることに対し疑問を投げかける。彼らにとって、「ホーム」は、もはやキューバではなくマイアミであり、「結局、米国人になったのだ」(Rieff, 1993: 208) と、その書を終える。

それでも、ベハーは、自分たちを「移民」(immigrants) と呼ぶ気にはなれないという。キューバからの出国もキューバへの帰還も困難な状況は依然として続いているからだ。

実際、キューバを去ることが片道切符の旅を意味し、キューバへの、それにキューバからの自由な往来が不可能であり、キューバの政治・経済・イデオロギーに異議を唱えることが国外退去によってしかなしえない限り、キューバの外のキューバ人は、ある種の亡命状態を生きていると言わざるを得ないと思う (Behar, 1996: 144)。

とはいえ、彼女は、躊躇なく在米キューバ人を「亡命者」とすることもできない。また、本論で詳しくみていくように、在米キューバ人が出国した背景も一様ではない。そこで、彼女は講義の題名を『キューバとそのディアスポラ』(Cuba and Its Diaspora) にする。

ディアスポラという語を選ぶことによって、私は非決定性 (undecidability) を選ぶ。カテゴリーの抑圧に抗するために。キューバの外のキューバ人は、移民であるかもしれないし、亡命者であるかもしれないし、その両方かもしれないし、どちらでもないかもしれない (Behar, 1996: 144)。

英米の社会研究におけるディアスポラという語の多用に対しては、もはや流行の域に達しており、なかには意味内容がなくなるまで拡大して使用している者もいるという批判がある (Tambiah, 2000: 169; Goulbourne, 2002: 3)。一見すると、ベハーがディアスポラという語を用いることも、そのような時流に乗っただけのものに見えるかもしれない。しかし、キューバ革命後の人的移動に関する研究を概観すると、ディアスポラという語を用いざるを得ない切実な状況が見えてくる。本論の目的は、ベハーの逡巡とディアスポラ概念の採用の背後にある歴史的経緯を追いながら、人的移動に関する研究の人類学的理解に寄与することにある。

次節では、問題設定と立脚点について述べる。第二章では、キューバ革命後、どのような経緯によって人々が国外に退去したのか、そして彼らがその経験と自己をどう表象してきたのかを概観する。第三章では、在米キューバ人によるキューバ史が「亡命」を中心に構成され、「移民」の主題化が避けられていることを指摘し、その背景を考察する。第四章では、在米キューバ人の政治経済的位置づけが冷戦の終焉によって変化するなか、ディアスポラという語の使用が、異なる意図や立場のせめぎあう議論のアリーナとなっていることを論じる。結語では、キューバ人の移動の諸相を

包括的にとらえるうえで、ディアスポラという語が有効であると結論づける。

## 2 ディアスポラに関する先行研究の議論

具体的事例の検討に入る前に、ディアスポラという、1990年代に広く流通し始めた用語の用いられ方とその問題点について述べる。言うまでもなく、現在この語が指示対象としている人々を表す言葉としてこれまで最も多く用いられてきた語は「移民」(immigrant)である。移民という語は、米国では、「自分たちを古い社会から引き抜いて、新しいホームを、これから忠誠を誓う新しい国において築き、そこにとどまろうという意志を持って来た人びと」というイメージを喚起する(Basch et al., 1994: 3-4)。このイメージが前提としているのは、移民が徐々に物質的な成功を治め、文化的に順応し、ホスト社会に国民として溶けこんでいくという「移民物語」であり、かつての移民、とくにヨーロッパから米国への「肌の白い」移民の経験をもとにつくられたモデルである(Basch et al., 1994: 40-41; クリフォード, 2002: 289-290)。移民に近似した語であるmigrant(移住者、季節労働者)の場合、ただ働くためだけにある場所にやってきて、それが済めばもとの国へ戻るか、別の場所へ行く人びとというイメージがある(Basch et al., 1994: 4)。現在のトランスナショナルな人的移動の経験が以上のモデルに当てはまらないことは、多くの調査によって報告されている(Basch et al., 1994; Tambiah, 2000; Ong and Nonini, 1997)。しかしその報告の記述において、従来の「移民物語」で使われてきた「移民」「移住者」といった概念を用いると、その枠組みを追認するかのような印象を与えてしまう。この物語に抗し、より現状に沿った表象をするため、国境を越えた人的移動にまつわる様々な新しい概念が1990年代に現れた。ディアスポラもその一つである。

ディアスポラという語の用いられ方は、おおまかに3つに分けられる。第一に、古くからその語が用いられてきたユダヤ人の経験に基づいたものがあり、サフランの定義が代表的である。彼によれば、ディアスポラとは、「祖国を追放されたマイノリティのコミュニティ」であり、追放された地への帰郷を志向するものである(Safran, 1991: 83-84)。第二に、過去の(祖先の)移動によって徴づけられただけでなく、統合や均質化を強いる国民や民族といった概念に抵抗する人びとを示す用法があり、英国のカルチュラル・スタディーズの研究者らによって主張されてきた。当初、彼らにとってディアスポラという語は、イスラエルの建国という問題を想起させるため、用いるのがためられるものだった(ホール, 1998a: 15-16)。しかしその後、彼らはディアスポラという語から、「帰還の希求」というニュアンスを取り去り、奴隷貿易によって各地に離散した黒人の末裔たちを指すのに用いるようになった(ホール, 1998b: 92, 97-98)。この流用は、戦略的かつ認識論的な転回をもたらした。「黒人」とされる人々は、今なお人種主義的差別にさらされているが、これに対抗する際、かつて主張されたように「アフリカ」を真のホームとする「起源」(root)論や、裏返しに「民族絶対主義」を用いることをしない、というものだ。英国では今なお、英国で生まれ育った「黒人」であっても彼らを「移民」と見なし、彼らが「本国送還」(repatriation)されれば問題はすべて解決する、という主張が根強く流通している(Gilroy, 1992: 155)。「アフリカ起源論」や「民族絶対主義」

は、そうした「外国人」排斥の思想と共犯してしまうのである。このジレンマに抗するため、カルチュラル・スタディーズの論者たちは、英国で育った「黒人」が英国の「国民」であることを前提としたうえで、以下のような意味合いで、彼らがディアスポラでもあることを主張する。かつてアフリカから奴隷として各地に離散し、分断されてきた人びとの歴史の共通性は、長らく忘却されてきた。だが、転地による「経路」(routes)をかいくぐってきたという経験を共有している彼らが、国民国家とは別のディアスポラの公共圏を構成しているものと再認識すべきとの主張である。ここではディアスポラという語は、政治的闘争の記号なのである(クリフォード, 2002: 285)。

この第二の用法でディアスポラ概念の定義が緩やかなものにされ、国民国家における不平等に抵抗する意図が含まれたことは、ふたつの対照的な反応を導きだした。ひとつは、ディアスポラが国民国家の抑圧を批判することに期待し、それをより開放されたものにしようとするものである。論者たちは、出身国とは別の場所に「郷愁」を覚える人類学者や、ある場所に何度も旅をし、そこに持続的な結びつきを感じる異文化ファン、さらには国民国家による抑圧に苦しむ「先住民」にまで、ディアスポラ概念の拡大を呼び掛ける(今福, 1993: 45; 鈴木, 2000: 322-323; Helmreich: 1992)。彼らは、「ひとつの国家、ひとつのネーション」というイデオロギーに抵抗するものとして、ディアスポラを倫理上望ましいスタンスとして捉えているのである(Levy, 2000: 141)。他方、このようなディアスポラという語の指示対象の拡張を懸念する声もある。彼らは、「帰還」の希求をディアスポラ集団の必要条件としない点でカルチュラル・スタディーズと立場を共有しながらも、サフランの定義とも重複しうる、具体的な転地の経験によって徴づけられた集団だけにディアスポラの語を適用することが妥当であると考えている(Goulbourne, 2002: 4)。これがこの語の第三の用法である。タンバイアを初めとする人類学者は、いくつかの事例報告から、ディアスポラと名指される集団が必ずしも国民国家の統合に抗するものではなく、逆に様々なナショナリズムに関与していることを指摘し、この語にナショナリズムからの解放という含意を求めようとする傾向を疑問視する(Tambiah, 2000; Ong and Nonini, 1997)。

こうした「ディアスポラ」という語をめぐる議論は、ギアツが「厚い記述」(1973 (1987))で述べた、ある概念が知的状況に衝撃を与えるときに起こる様相を示している。初めは、その概念が、それまでの問題の何もかもを明らかにする見込みがあるように思われる。しかし、その概念に関する検討が蓄積されるにつれ、それは、「以前のような壮大な、すべてを約束するようなものでも、自由自在に無限に適用できるものでもなくな」る。しかし、「それでも何かを説明する」ゆえに、「この何かとは何であるかを明らかにすることに、われわれの関心は移」るのである(ギアツ, 1987: 4)。そして、こうした観点から議論を展開するのが、クリフォードの論文「ディアスポラ」である(クリフォード, 2002: 277-314)。しばしば誤解されるが、彼は、ディアスポラが国民国家に抵抗し、解放を志向するものだというスタンスをとっているわけではない。オングラが誤解しているのとは違ってクリフォードは、ディアスポラ集団が、追放や差別などの否定的な経験への反動として、ナショナリズム的な感情や運動を起こす可能性があることを認識している(cf. Ong and Nonini, 1997:

324)。ただし否定的契機のゆえに他のグループと連帯して抵抗するという可能性もある、両義的な存在であるとしているのである。

歴史的事例の検討を通じて、ディアスポラという語の用いられ方とその対象となる集団との関係を検討するクリフォードの議論の重要性は言うまでもない。本論考は、クリフォードと同様の観点から、ディアスポラという語の持つ意味を、在米キューバ人に関する言説をキューバ・米国の歴史的事例に即して検討し、明らかにすることを試みる。

### 3 ディアスポラと厚い記述

「ディアスポラ」という概念は、雑誌『ディアスポラ』が創刊された1991年の時点ですでに「[ディアスポラ] コミュニティとそれについて書く学者の間で流通するように」なっていた (Tölölian, 1991: 4-5, 7)。個々の用いられ方には、これまで見てきたように多様性が認められるが、その語の使用に従来の移動者表象に対する批判が込められていた点では共通している。この点を鑑みると、タンバイア (2000) のように、「ディアスポラ」と「移民」という語を、互換可能なものとして用いるには問題がある。そこからは、長年用いられてきた移民や、エスニック・グループといった語の代わりに、なぜディアスポラという語が流通するようになったのかということへの考察が抜け落ちてしまうからである。ただし、ディアスポラとは何かという抽象的・一般的な議論は、ともすれば政治的立場性の論争に終始してしまう傾向にある。問題は、文化的「抵抗」を主題とする研究と同様、ディアスポラという語に解放のモラルを求める研究においても、民族誌的根拠が示されることが稀だったことだろう (Levy, 2000: 141; Ortner, 1996)。いまディアスポラをめぐる議論に求められているのは、厚みのある民族誌的記述とその相互比較作業である。私たちはまず、ある特定の社会的・歴史的文脈において、ディアスポラという語が流通する前はその対象がどう表象され、何が問題だったか、そしてディアスポラという語が現れて何が変わり可能になったかを、具体的事例を通じて詳細に示す必要がある<sup>2)</sup>。それは必然的に歴史的・民族誌的な「厚い記述」にならざるをえない (ギアツ, 1987)。ディアスポラという語が、民族誌的記述を豊かにするうえでも有用であるかどうか、記述そのものを通じて検討されなければならないだろう。本稿は、こうした観点から革命後の在米キューバ人表象を追跡し、今後の比較検討作業において議論を精緻化するための、具体的資料を提供することを目的としている。

方法としては、言説分析を行う。ここでは、在米キューバ人に関して書く人も、書かれる人も、テキストを読む人も、<なま>の社会的現実を描きつくりだす「著者たち」として参加しているという見方をとる (小泉, 2002: 269)。ディアスポラの分析では、支配的／被支配的な立場の違いを明確にすべきだという見解もあるが (クリフォード, 2002: 285; 戴, 1999: 138)、その区別がそう明確でも確固としたものでもないことは、本論で検討する在米キューバ人に関する言説の検討を通じて明らかになるだろう。

## II 革命からの亡命

### 1 概要

キューバ革命後の人的移動は以下のようにまとめられる (García, 1996; Masud-Piloto, 1996)。在外キューバ人の数は、およそ100万人から200万人ともいわれ、現在のキューバ共和国在住の人口約1,100万人の10分の1以上にのぼる。革命後の米国への移動は、常に少数ながらも継続してきたものの、大人数が移動する「波」が、およそ15年おきに起きてきたと言われている。

**第一波** 1959—1973年 約45万人

【前半】 1959—1962年 「黄金の亡命者」

【後半】 1965—1973年 カマリオカ港開放と、「自由の飛行機」による渡米

**第二波** 1980年 約12.5万人 マリエル港開放による「マリエリート」の渡米

**第三波** 1994年 約3.7万人 筏による「バルセロ」の渡米

1959年1月1日未明、カストロらの革命軍の攻勢に押され、それまで政権を握っていた大統領パティスタが国外に脱出する。富裕層がそれに続き、多くの人びとが国外に避難を始めた。主な滞在先は米国、それもすぐ近くのマイアミ市だった。1961年、米国政府の支援を受けた在米キューバ人亡命者の一部がキューバに侵攻するが、不成功に終わる（ピッグス湾事件）。侵攻を受け米キューバ関係はさらに悪化、同年にカストロは革命が社会主義的なものであると宣言し、ソ連との結びつきを強めた。これを機に、当初はカストロがじきに失脚するまでの短期的なものと思われていたキューバ人の亡命が長期化するという認識のもと、米国政府はキューバ難民計画 (Cuban Refugee Program) を開始する。革命後、1973年までは、キューバから米国への移動を希望する人々を運ぶ自由の飛行機 (Freedom Flight) と通称された定期便があり、この間に45万人もの人びとが米国に移動した。米国の政治家やメディアは、キューバを去る人々が「われわれの社会に賛成票を投じ、自分の社会に反対票を投じている」のだと表現し、その移動を「共産主義の弾圧」からの逃避として描いた (Masud-Piloto, 1996: 32-35)。このため、1966年に制定されたキューバ難民地位調整法 (Cuban Adjustment Act) は、どのような手段であれ、キューバから米国にたどり着いた者はすべて政治難民と見なし、その後、米国で一年間を過ごせば、米国永住権 (permanent legal residence) を申請する資格を得られるという、他国出身者にはない権利を与えた (Masud-Piloto, 1996: 129)。

革命後に渡米したキューバ人には、企業家や専門家が多く、本国での生活や教育の水準が高かった「黄金の亡命者」 (Golden Exiles) であり、米国でもごく短期間に適応したといわれる (Portes, 1969)。彼らは、キューバの首都ハバナから140マイル (約225km) しか離れていないマイアミにエスニックな包領 (ethnic enclave) を形成した (Portes and Bach, 1985: 200- 239)。2000年の統計によれば、キューバ系住民は全米で124万人を超え、そのうちの半数以上である65.1万人がマイアミ・デイド郡に集中している (Guzman, 2001: 3,5)。つまり、マイアミ市とその周辺は、キューバ国外にありながら、首都ハバナ (219万人、1999年) に次ぐキューバ人人口を擁するのである (共同通

信社, 2003: 465)。マイアミとキューバ本国を2つのキューバ (Two Cubas) と呼ぶ在米キューバ人さえいる (de la Campa, 2000: 1-21)。単に人数が多いだけでなく、米国という世界的に覇権を握る国の中心にあり、政治経済界に有力者もいる在米キューバ人は、数の上では少数でありながら、特にマイアミでは「マイノリティ」とは呼べないほどの存在力を持つ。

## 2 亡命者か移民か

しかし、米国に渡り、政治経済的な力を持つことは、多くの在米キューバ人にとって目的ではなかった。在米キューバ人は自分たちが米国にいるのは、キューバから追放されたか、出国せざるを得ない状況に追い込まれたからだとしてとらえている。カストロは、革命後に米国に去ったキューバ人を「反革命分子」を意味する「うじ虫」(*gusanos*) と呼び中傷した。これに対し、渡米したキューバ人自身は亡命者 (*exiles, exiliados*) と名乗った。調査を行った非キューバ人研究者らも、この名乗りを妥当と考え、「難民」も互換可能な用語だが、「亡命者の方が、政治的含意と『帰還の願い』を表すため、より正確な記述用語であろう」としている (Fagen, Brody & O'Leary, 1968: 2)。また、キューバから革命後に渡米した社会学者ポルテスも、在米キューバ人たちは亡命者として自己を認識しており、他の移民と自分たちを差異化して捉え、帰国するのだから米国人に同化すべきではないと考えていたという (Portes, 1969)。1960年代に渡米したキューバ人亡命者の多くは、キューバでの生活水準が高く、経済的向上を望んで出国したわけではなかった。当時の米国では、キューバ危機によって共産主義の脅威が身近に感じられており、また、渡米したキューバ人の教育水準が高く、「白人」と見なされたため、彼らは米国人から驚くほど暖かく迎えられたという (Portes, 1969: 507-508)。

しかし、カストロ政権が継続し、帰還が延期され続けると、徐々にポルテスも含めた研究者らも、在米キューバ人を「移民」「エスニック・マイノリティ」「キューバ系アメリカ人」と呼ぶようになった (cf. Portes, 1969; 1984; Portes and Bach, 1985)。それでも、1990年代になってもなお、一般の在米キューバ人の間では移民や米国人という自己表象は定着しなかった。特に革命直後の10年間に渡米した人々は、移民と呼ばれることを嫌う、とハバナ生まれで米国育ちの歴史学者ガルシアはいう。その理由はこうである。

移民は、暗に選択を意味する。だがほとんどのキューバ人移住者 (*emigré*) は自分達には選択の余地など無かったと信じている。彼らは、カストロ政権の社会的・経済的・政治的カオスによって自国から押し出されたと感じているのだ (García, 1996: 84)。

米国に順応したとしても、「移民」や「米国人」と呼ばれることは、好まれなかった。なぜなら、米国への「同化は亡命の終わりを告げるものであり、政治的なレベルではフィデル・カストロが勝利した」ことになると認識されているからだ (Rieff, 1993: 30)。

以上をまとめると、在米キューバ人のあいだでは、亡命と移民は、以下のような含意をもった語として使い分けられていたといえる。

**亡命：政治的理由による出国**

**出身地への帰還を希望**

**富裕層**

**移民：経済的理由による出国**

**移動先への順応を希望**

**貧困層**

在米キューバ人の間では、祖国への帰還を希望する人びとは、ディアスポラという語ではなく、亡命者という言葉で表されていた。また、亡命は、クリフォードが示すように個人的な経験に限定（クリフォード, 2002: 285）されず、集団的なものにも用いられている。

驚くべきことに、調査によれば、在米キューバ人の多くは米国に帰化しているが、それが同化を意味するとは考えていない。帰化は「米国人」になるためではなく、投票権や専門職の就職に必要な免許の取得を可能にするための手段でしかないのだ。彼らにとって、投票権は、米国政府に働きかけてカストロに不利な政策をとらせるための手段であり、経済的成功は財産を奪った革命への復讐として考えられていた。結果として、在米キューバ人は経済力があり、政治的に団結し、文化的に同質な集団であるという成功物語が広まったのだという（Croucher, 1997: 102-141）。

成功物語の形成と亡命者という自己規定は、カストロの共産主義<sup>3)</sup>政権を不当なものとし、自分たちをキューバの正統な代表者として対抗的に位置づけようとする試みだといえる。例えばそれは、マイアミのコミュニティ・カレッジの人類学者で精神科医でもある在米キューバ人サンドバルの次の言葉に表れている。

今日、〔キューバ〕島に残ったキューバ人は、自らのナショナル・アイデンティティに気づいていない人々である」（Sandoval, 1986: 70）。

彼女は、キューバのナショナル・アイデンティティは、1940年代に生みだされたスペイン系住民の中流階級の倫理によって形成されたと主張し、革命政府によるかつてのキューバの「記憶」の抹消を批判する。

新しい偶像への忠誠を叩き込むために、大々的な宣伝がなされ、事実上、健忘症のネーションをつくり上げた。このネーションがすることと言えば、新しい革命のスローガンを無限に繰り返すだけである。（略）キューバは記憶のない国だ（Sandoval, 1986: 50）

カストロの示すキューバ像に対し、マイアミのキューバ人は、彼らの記憶するキューバこそ真正なものだと主張してきた。米国政府も、共産主義に対抗するため、在米キューバ人の証言を利用し、彼らの集合的記憶の形成の一翼を担った（たとえば、de la Campa, 2000: 63-64）。

### 3 成功物語から排除されたもの

在米キューバ人は、同化を拒否しながらも、米国への批判をあまり公にはしてこなかった。ペーハは自分の親が、亡命者として受け入れてくれた米国には常に感謝すべきであり、批判することは



無礼で不道徳でさえあると考えていたという (Behar, 1993: 320-321)。しかしこうした親米的な態度は、1960年代から70年代の米国における性革命、公民権運動、ベトナム反戦運動といった「左傾化」の風潮とは逆行するものだった。精神科医サンドバルによれば、在米キューバ人たちは、こうした運動を、カストロや共産主義者の「陰謀」によるものと捉えていたため、精神的苦痛を訴えた (Sandoval, 1979: 143)。彼女はまた、その苦痛が、米国での急激な地位の変化によるものだと記述する。

15年も経たないうちに、引き抜かれた (uprooted) キューバ人たちは、政治亡命者 (同盟者) から、難民 (寛大な援助プログラムを受ける資格をもつ)、そして米国の居住者、市民 (マイノリティ) になってしまった (Sandoval, 1979: 143)。

この分析によれば、在米キューバ人にとって、難民として援助を受けたり、米国の市民になったりすることは、特権などではなく、恥ずべきこととして受けとめられていた。これは必ずしも、「特権階級」が初めて貧困を経験したことを意味するのではない。後にも述べるように、この時期に渡米したキューバ人には、富裕な支配者層だけではなく、もとは貧しく、キューバへ移民し、出稼ぎ労働によって生活の基盤を築いた人びとも含まれていた。米国で再び成功した者もいる一方、キューバで築いた地位からの後退を余儀なくされた者も少なくなかったのである (Masud-Piloto, 1996: xv-xvii)。

一方、幼少時に渡米した場合には別の問題があった。彼らは渡米した時点で「キューバ人になるには幼すぎたし米国人になるには成長しすぎていた」と感じた。自分を含むこの世代を、ペレス＝フィルムは「1.5世代」(Pérez-Firmat, 1994: 4,6) と呼ぶ。1.5世代の在米キューバ人らは、キューバ人の親と、激変する米国社会の狭間で、自らの位置付けにとまどった。そのうちの一人であるフェンテスは、親の言葉にならって反共産主義者として「ベトナムの米国軍に声援を送った」場合、ほかの学生から『『帝国主義の子分』と見られ』た、と回想する。「キューバ人亡命者は、カストロの革命が解放した哀れなキューバ民衆から逃げてきた抑圧者」として軽蔑されたというのである (Fuentes, 2001: 62)。

一方、キューバ人の人種概念では「白人」とされるにも関わらず、米国で他の「白人」と差異化される「ヒスパニック」として差別された経験を持つ若者も少なくなかった (Croucher, 1997: 47; Torres, 2001: 182-183,191)。しかし、米国で差別されていると認めることは、何かにつけ米国や亡命者を批判してその革命を正当化するカストロに、新たな口実を与えることになるため、在米キューバ人の間では論争の対象 (controversial) となっている (Torres, 2001: 85)。米国での被差別経験によって、キューバの社会主義政権の主張に共感するようになった1.5世代の若者は少なくなかった。そのうちの55人が、1977年にはキューバ政府から公式に訪問を認められ、歓迎される。翌年、カストロは、在外キューバ人を「海外のキューバ人コミュニティ」(*la comunidad cubana en el exterior*) と呼び改め、両者の「対話」(*Diálogo*) を呼びかけた。「対話」の議題は、キューバ政府側の表現によれば、①「反革命の囚人」を米国に亡命させる、②離散した家族のキューバから米国

への呼び寄せを可能にする、③「キューバ出身で外国に定住した人々」のキューバ訪問の実現である (Aguirrenchu y Madan, 1994: v; 比較参照Torres, 2001: 95)。しかし、亡命を引き起こした革命の首謀者であるカストロからの「対話」の申し出は、多くのマイアミのキューバ人の中で否定的に受け止められた。「対話」に参加する者は軽蔑的に「対話屋」(*dialogueros*) と呼ばれ、「裏切り者」「臆病者」などと非難されたという (García, 1996: 49)。「対話屋」は他の在外キューバ人から脅迫され、2人が殺害される。それでも「対話」は実施され、結果的に上記の議題は実現した。

翌年の1979年には、それまでの「対話屋」への批判にもかかわらず、およそ10万人もの在外キューバ人がキューバを訪問した。政治的にはカストロ政権に共感していなくても、郷愁と、キューバに残った家族のために多くの人が訪れたのである。滞在中、在米キューバ人は、キューバ在住の国民には立ち入りが禁止された外国人向けのレストランや店、ホテルに入ることを許可され、そこで購入した商品を親族にふるまった。革命後に教育を受けた若い世代はこうした在外同胞への待遇と、革命思想との矛盾に驚き、革命への不信感を抱くようになったという (García, 1996: 53-54; Sandoval, 1986: 21-23)。これが翌年、米国への人的移動の第二波を起こすきっかけになった (Pedraza-Bailey, 1985: 29)。彼ら、マリエル港開放による渡米者は、後にマリエリート (*Marielito*) と呼ばれるようになる。

#### 4 マリエリートが想起させたもの

1980年4月、キューバ人6人がトラックでキューバのペルー大使館領内に乗り込み、政治亡命を求め受諾された。ペルー大使館が6人の身柄の引き渡しに応じなかったため、報復措置としてカストロが、警備を解除するので出国したいものはペルー大使館領へ行くように、と演説すると、敷地内に1万人以上が集まったとされる。カストロが、キューバのマリエル港までこれらの出国希望者を迎えに来てよいと在米キューバ人によびかけると、彼らは家族や親戚を船で迎えに行った。キューバ当局は、他の出国希望者をも強制的に乗船させる。この中には革命後の教育を受けた若年層が多く、マイアミのキューバ人は、彼らを革命の不成功を示す証拠として当初、歓迎した (Sandoval 1986: 10-11)。米国のメディアでも、初めのうち、この出来事は、自由の艦隊 (Freedom Flotilla) として肯定的に報道される。

しかし、カストロが、マリエリートは<犯罪者、精神病患者、同性愛者、売春婦など>といった革命の役に立たないクズ (*escoria*) であり、キューバから処分するために送り出したのだと演説すると、メディアにおけるマリエリオートのイメージは急速に悪化した (Hufker and Cavender, 1990)。貧しい身なりの独身男性を中心としたキューバ人が溢れんばかりに船に乗ってやってくる様は、彼らが実は経済移民なのではないかという疑いを米国のメディアに抱かせる結果になった。在米キューバ人研究者でも、マリエリートはキューバ難民地位調整法に促進された経済移民であるとする者もいる (Masud-Piloto, 1996: xv-xvii)。それどころか、一般の在米キューバ人の中には、マリエリートが「遅れて」渡米してきたのは、カストロが送りこんだ「スパイ」だからではないかと疑

う者も多かった (García, 1996: 72)。マリエリートの4分の3が、先着のキューバ人から差別を受けたと答えたという調査結果からも明らかなように、後者は前者から距離をとった (Portes, Clark & Manning, 1985: 57)。マリエリートという名前自体、先着のキューバ人が、「亡命者の自己」と、「移民の彼ら」を差異化するために生まれた呼称であるといえる。こうした見方に対し、マリエル開放で出国した小説家レイナルド＝アレナスは、キューバのような「全体主義国家」からの出国はすべて政治的なものであると訴えた (アレナス, 2001: 105-109)。しかし現在でも、マリエリートが先着のキューバ人に受け入れられるためには、マリエル開放で来たことを伏せたり、政府の妨害でマリエル開放まで出国が遅れたと弁明したり、強く反共産主義や反カストロという立場を主張したりする必要があるという (Bettinger-López, 2000: 194)。

先着のキューバ人がマリエリートを拒否する理由としては他に「人種」の違いが挙げられる。「ムラートと黒人」<sup>4)</sup>を3%も含まなかったそれまでの革命後のキューバ人亡命者の人種構成と異なり、マリエリートの15-40%が「ムラートと黒人」だったとされる (García, 1996: 68)。それまでは、ある在米黒人キューバ人が、マイアミの亡命者の集団的な記憶は「漂白」されていると表現したように、彼らは、キューバを、「人種」のない国、または「黒人」のない国として記憶していた (Rieff, 1993: 132)。だが、マリエリートの到来で、そうではないことを想起せざるをえなくなったというのである。

### Ⅲ キューバというネーション

キューバを人種のない国として想像する傾向は、キューバ革命後のマイアミに始まったことではなく、キューバの独立戦争時代 (1868-1898) にまでさかのぼる。

#### 1 人種なきネーション

1492年にコロンブスに「発見」されて以来、数十年で先住民がほぼ絶滅したキューバは、長い間、植民者スペインにとって、他地域への中継地点でしかなく、人口も少なかった。だがハイチの黒人奴隷による革命 (1791年) によって当地の砂糖産業が衰退すると、キューバは代わる砂糖生産地として位置づけられた。これによって経済が発展すると、クリオーリョ (植民地生まれの白人) はキューバの独立を望むようになった。その一人、カルロス＝マヌエル・デ＝セスペデス (Carlos Manuel de Céspedes: 1819-1874) が、「君たちは今日から、私と同じように自由だ」と述べて自分の黒人奴隷を解放して第一次独立戦争 (1868-1878年) を開始し、戦争中、歩兵から将軍に昇格したムラートのアントニオ・マセオ (Antonio Maceo: 1845-1896) は、「白人も黒人もいない、いるのはキューバ人だけだ」と宣言したとされる (Ferrer, 1999: 7, 15)。

ここで注意すべきなのは、独立したネーションとなるためには人種を超えて結束するべきであり、そのためには人種を忘却せよ、と呼びかけられていることである。その特異性は、先に独立したラテンアメリカ諸国が、通常、独立する根拠として、自分たちがすでに現地のインディオの血を

ひく混血であり、スペイン人とは異なるネーション（民族）であることをあげたことと対比すると  
 いっそう際立つ（Ferrer, 1999: 4）。この時期のキューバにおける異人種間の性的な混淆に関するタ  
 ブーをみれば、混血性が主張されなかった理由は明らかであろう（Martinez-Alier, 1989: 5）。

混血性がキューバでもナショナル・アイデンティティとして称揚されるようになるのは、20世紀  
 前半のことである。キューバ民俗学者フェルナンド・オルティス（Fernando Ortiz:1881-1969）は、  
 長年滞在したヨーロッパにおける非西洋美術の流行を受け、キューバのアフリカ性を称揚するよう  
 になった。その後彼は、当時のキューバに世界各地からの移民や出稼ぎ者がいたことを鑑みて、キ  
 ューバ性（*cubanidad*）をごった煮料理アヒアコ（*ajiaco*）に喩え、キューバの地に存在してきた様々  
 な人種や文化の混合から成るものとして示し、従来差別されてきた混血性を肯定的なナショナル・  
 アイデンティティに転じた（工藤, 1997: 66）。

しかし、「黒人」を融合する混血の理念は、「白人」の多い在米キューバ人の間では黙視されてい  
 る。オルティスの混淆概念をしばしば引用するペレス＝フィルムマでさえ、マイアミやキューバ系ア  
 メリカ人の「キューバ」と「米国」の文化的混淆を称揚しながらも、人種や「アフリカ」的要素へ  
 の言及をたくみに避けているように見える（Pérez-Firmat, 1994）<sup>5)</sup>。その背景として考えられるの  
 は、1.5世代のキューバ人の親が亡命を決断したとされる動機として語られるものである。多くの  
 親が出国を決めたのは、革命後の急進的な政策、なかでも農村で生徒が農民に字を教える識字運動  
 （1961年）などによって、白人の娘が親の監督から離れて、有色人男性と接触する可能性を回避す  
 るためだったという（de la Campa, 2000: 59; Fuentes, 2001: 60）。つまり彼らの亡命は、人種混淆に  
 対する恐れと結びついていた。先ほどの問題に戻れば、先に米国に着いたキューバ人がマリエリ  
 トを忌避したのは、亡命による理想的な共同体を想像するなかで、人種という「問題」そのものが  
 忘却されてきたことを想起させられたためだったといえよう。なおかつ、単身で海を渡ってきた「黒  
 人」や「混血」をも含むマリエリートたちは、再び自分たちの娘に対する身近で現実の脅威として  
 立ち現れたのだ。

## 2 亡命の伝統、移民の忘却

人種問題やイデオロギーの対立に触れず、国境を超えたネーションの物語を成立させるために、  
 在米キューバ人団体は、自らの亡命経験を19世紀の独立戦争の英雄と象徴的に結び付ける戦略をと  
 ってきた、とガルシアは指摘している（García, 1996: 92-94）。最も強力なシンボルとして人気があ  
 るのは、スペインからの独立のために結成されたキューバ革命党（*Partido Revolucionario Cubano*）  
 の党首で、詩人、ジャーナリストでもあったホセ・マルティ（José Martí:1853-1895）である。キ  
 ューバから亡命し、スペイン、メキシコ、グアテマラ、ニューヨーク、フロリダを転々としながら、  
 祖国を自由キューバ（*Cuba libre*）にするため、外国で準備を進めた使徒（*el Apóstol*）マルティと  
 結びつけて自己表象することは、亡命者団体としての理にかなっていた<sup>6)</sup>。在米キューバ人研究者  
 は、キューバのネーションとその文化的アイデンティティは、そもそも19世紀の亡命キューバ人指

導者たちによって国外で構築されたものであると主張する (Pérez, 1993: 13; Poyo, 1989)。

亡命者という言葉は、指導者や知識人といった個人を指すのに使われることが多い。しかし在米キューバ人研究者ポヨは、19世紀に独立戦争を避けて渡米した葉巻職人たちも亡命者と見なせるといふ。なぜならこうした労働者たちは、亡命者として自己表象をしていたからであり、それは「キューバ史において亡命の伝統は明らかに存在する」ことを示すのだという (Poyo, 1995: 77)。とはいえ、こうした労働者は、特に際立った職能を持っていたわけではなく、貧しく、米国社会への順応も遅かった (del Aguila, 1998: 5)。つまり、これまでみてきた在米キューバ人のカテゴリーでは、「移民」に分類されてもおかしくないはずである。なのになぜ敢えて亡命者として主題化されるのだろうか。在米キューバ人歴史学者ペレスJr.は、この点をこう説明する。戦時中、独立を求めてマルティが率いたキューバ革命党は、独立支援のためにストライキを控え賃金を党に寄付するよう説得するとき、葉巻職人を、キューバへの帰還を望む亡命者として扱った。が、戦後は多くの者が経済的理由で米国に残り、結果として移民となったのだという (Pérez Jr., 1995)。

このように、在米キューバ人研究者は、しばしば、移民とされる対象も亡命者としての側面がなかったかどうかを重点的に検討してきた。しかし、キューバやスペインの研究者による移民の研究をひもとくと、在米キューバ人研究者の描く「亡命中心史観」とは違う側面が見えてくる。在米キューバ人には、スペインからキューバへ移民した人びとの子孫が多い。しかもその移民は、それほど遠い過去のことではなく、マルティが第二次独立戦争 (1895-1898年)<sup>7)</sup>で戦死した後のことである。その移民の背景には、人種主義的な出稼ぎ労働の推進がある。マルティたちの亡命の時代と、革命後の亡命の時代の間、キューバへの「移民の時代」というものがあつたと言えるほど、その人的移動の規模は無視できないものだった。

キューバでは独立戦争後、戦争による人口減少と奴隷制の廃止 (1884年) のため、労働力が不足していた。これを補うだけでなく、キューバを「白人」中心の国にするため、スペインのガリシア地方とカナリア諸島を中心として季節労働者の出稼ぎ／移民が推進された (Naranjo Orovio, 1987)。1910-20年代のキューバは、第一次世界大戦を背景とする砂糖価格高騰のため好景気だった。1899年に150万人ほどしかいなかったキューバの人口は、1931年には396万人へと、30年間で2倍以上に増加した (Villaruel and Chávez, 1975: 46,62)。しかし大恐慌 (1929年) に伴う外国人排斥の気運によって、帰化への圧力が高まる。1960年代にマイアミに移ったキューバ人の相当数が、この頃帰化したスペイン人移民第一世代と第二世代だったという見方もある (Portes and Bach, 1985: 146)。

これほどまでに移民の占める位置が大きく、身近だったにも関わらず、1959年以降の在米キューバ人研究者による研究を概観すると、他国からキューバへの移民に関しては、ほとんど扱われていない。しかも移民と見なすことが可能な、キューバから米国に避難して働き、そのまま移り住んだ人びとも、あくまで亡命者意識を持った人びととして主題化されている。しかし、革命前に渡米した移民は、かなり異なる自己認識を持っていたことが以下の事例から推測される。ベハーがある研

究会で見かけた、革命前から米国に住むあるキューバ人研究者は、他の在米キューバ人によるカストロ政権への批判に憤怒しこう言った。

俺みたいにブロンクスで育ったラティーンの子供ってというのは、自分には何の価値もないと、クソよりも価値がないと、感じていたんだ。そんななかで、フィデルがグリンゴ〔米国人の蔑称〕に地獄に落ちろ、って言えたってことは、俺にとって大事だったんだ。意味のあることだったんだ。俺はそれを忘れない (Behar, 1996: 152-153)。

この男性のみならず、革命前に渡米したキューバ人の多くはカストロの革命に共感したといわれる (Torres, 2001: 90)。背景には、彼らの移動が革命後の渡米とは非常に異なった条件下にあったことが挙げられよう。彼らは、政治難民としての資格を得ることはなかったため、他の多くの移民同様、米国で差別され、搾取されていると感じた。その結果、先述した、米国での差別経験から社会主義キューバに期待をよせて訪問した1.5世代の若者たちと同じように、米国を批判し、労働者を擁護するカストロを支持するようになったのだと考えられる。結果として彼らの経験は、在米キューバ人研究者が亡命を中心に主題化する歴史からは排除されてしまうのである。

革命後、米国は人道主義としてキューバ人難民の受け入れを語ったが、革命前であれば、キューバの政治迫害から米国に避難した者であっても、単なる不法外国人として国外退去処分にされる恐れがあった (Torres, 2001: 173)。そのうえ、革命後、キューバ人として亡命したユダヤ人の多くは、その30年前、ヨーロッパやトルコでのユダヤ人排斥から逃れて来たにもかかわらず、1924年の移民帰化法という人種選別的な法律によって米国入国を拒否されたため、キューバにとどまらざるを得なかった人々であった (Bettinger-López, 2000: xxxvi-xxxviii)。政治的抑圧を逃れて出国しても、移動先で政治難民として認定されるか否かは、そのときの国家間の状況に大きく左右されるのである。

以上の例から分かるように、革命前のキューバから／への移民の検討は、移民か亡命者かという定義付けや、人道的に見える難民援助までもが、軍事的で、受入国の政治的理由に従って行なわれることを明らかにしてしまう (Malkki, 1995: 499)<sup>8)</sup>。それは、米国とキューバの不均衡な関係や、米国およびキューバの移民政策の人種主義的側面を明るみに出すことにつながる。これを避けてキューバ史を顧みるには、革命前の移民の歴史は、亡命者の公的記憶の物語からは排除するか、亡命の歴史として書き換えられなければならない。つまり、在米キューバ人が移民を主題化せず、亡命を伝統とするキューバ史を描こうとしたのは、米国への批判を避け、キューバ政府に対抗しながらも、自己をキューバのネーションの構成員として位置づけるための試みだったのだと言えよう。

## IV 冷戦後のキューバとディアスポラ

### 1 バルセロと境界

在米キューバ人が亡命者という名乗りに執着してきたのは、彼らを国外退去に追い込んだはずの現キューバ政府が、再三にわたって、在米キューバ人を単なる「海外定住者」「移民」として名指

すことに固執してきたことに対応している。1994年、キューバ政府が在米キューバ人を招待した会議が『*La Nación y la Emigración*』（ネーションと移民）と銘うって開催された。これに対して在米キューバ人は、自分たちを亡命者ではなく移民と呼ぶのは、亡命の背景となった政治的抑圧を隠蔽するものだと批判した（Behar, 1996: 151; Torres, 2001: 167）。一方、プエルトリコに亡命したキューバ人社会学者デュアニは、こうした政治的な表象の闘い自体を放棄しようと提案する。

前者（ネーション）には定まった領土と安定した文化の核があり、後者（移民）は祖先の起源から引きぬかれ、転置された自意識を持つ、という慣習的な区別の仕方を、学者はやめるべきだ。代わりに、新しい言葉、旅する文化の美学、越境、それにノマド・アイデンティティを探求し、こことあちらのキューバ性（Cubanness）の間の象徴的境界をひきなおそう（Duany, 2000: 18-19、括弧内は引用者）。

しかし、この会議の同年に、死の危険を冒してキューバから筏で出国を試みた人々がいたことを考えるとき、この解決案はあまりに楽観的に聞こえる。筏によって移民しようとする人びとはバルセロ（*balsero*）と呼ばれ、それまでにもいたが、1994年に約3.7万人がこの手段をとった背景は以下のとおりである。1980年代後半まで輸出入の約80%をコメコン（COMECON）に負っていたキューバは、その崩壊（1989年）によって深刻な経済危機に陥る。困窮のためキューバ人が、船をハイジャックして出国しようとする事件が相次いだ。1994年8月5日には、キューバ人を乗せて米国に向かう船が出るという噂が流れ、ハバナの海沿いに数百人が集まったが、船は来ず、革命後最大規模の暴動に発展する。その夜、カストロが出国を阻止しないと演説すると、希望者は白昼堂々と、筏でマイアミに向かい始めた。タイヤのチューブなどで手作りした筏で、遭難やサメに襲われる危険を知った上でキューバを去るバルセロにとって、キューバと米国間の境界は、生死を賭けて越える現実的な境界であり（Pérez, 1999: 200）、しかもそれは、政治経済的な力関係によってひかれてしまうものである。米国政府はマリエリートのような大規模な移民に発展するのを牽制するため、バルセロを直接自国に移送しないと発表し、キューバ領土上に1903年以来「無期限借用」しているグアンタナモ米軍基地に収容した。そして以後は、キューバからの「不法移民」を送還し、代わりに年間2万人のキューバ人移民を募集と抽選によって受け入ることに合意した。つまり冷戦が終結したため、米国政府にとってキューバ人の渡米を共産主義からの亡命として扱う意味は薄れ、亡命者か移民か、ネーションか移民かという「こことあちら」を決める境界は、米国政府とキューバ政府の交渉によってひきなおされたのである。

## 2 脱領土化と再構成員化

キューバ国民の不満を限界まで高めれば、彼らが蜂起し、カストロ政権の崩壊が早まると期待して、1996年、全米キューバ人団体CANF（Cuban American National Foundation）は、米国政府が対キューバ経済制裁を強化するよう働きかけ、これを実現した。キューバ政府に「マイアミの極右マフィア」と非難される彼らは、強硬手段をとることも辞さない。しかし、家族がキューバに残る在外

キューバ人は、キューバの家族に送金や贈り物をすることによって、結果的に現政権の崩壊を防いでいるといえる。現在、キューバでは日用品さえ、米ドルで米国と同等かそれ以上の価格でしか手に入らないことが多い。にも関わらず、キューバ国内の労働者の月給は、通常、キューバペソで支払われるうえ7ドルから50ドル程度に過ぎない。それでも、ひと月に100ドルでも送金を受ければ、生活難はかなり解消されるため、現在のキューバでは、家族の誰かが外国にすることが強く期待される傾向にある。キューバ在住の研究者の調査によれば、革命直後に米国に渡ったキューバ人は、残った家族からは、恥 (*vergüenza*) やタブー (*tabú*) と言われた。が、今は、家族の国外移住はドルを得るといふ、政府の都合のために (*por conveniencia del gobierno*) 認可されたもの (*autorizado*) と考えられている。冗談めかした決まり文句もあるという。「生き抜くためにはFE (信仰) を持たなければいけない…*Familiar en el Extranjero* (外国にいる親族) をね」(Martín, C. & G. Pérez, 1998: 126,142,144)。

以上のことからわかるように、キューバ政府が折に触れて国外に離散したキューバ人を「キューバ人」として再認識する理由のひとつに、経済的利益がある。これは、バッシュラ (1994) が調査した、トランスマイグラント (*transmigrant*) に対して出身国政府がとる政策に近似している。トランスマイグラントは、ハイチ、フィリピンなどから米国に渡り、二国間 (以上) を頻繁に往復する人びとを指すが、彼らは生活と経済の基盤を米国に置く。逆説的に見えるがそれゆえに、出身国は、彼らの国籍を剥奪しないことを保障し、米国の永住権を持つことを奨励する。こうすることによって、トランスマイグラントは出身国の貿易に有利な契約を結ぶよう米国に働きかけると同時に、送金で経済を潤してくれるからである (Basch et al., 1994: 3, 270)。この場合、国民国家は脱領土化され、国境は国民の移住先まで引き伸ばされる。トランスマイグラントたちは、祖国から追放されることもなければ、祖国から解放されることもない。つまり、バッシュラの言葉でいえば、脱領土化された国民国家の成員にとって、祖国を失うという意味でのディアスポラ状態はあり得ないのである (Basch et al., 1994: 268)。長らく、在外キューバ人のほとんどは、再びキューバに住むことはおろか、査証無しでキューバを訪問することもできなかった。現在でも、キューバ訪問時には、キューバ人としてのパスポートの取得ないし更新が義務付けられており、彼らの親族への送金は、国際観光に次ぐキューバの外貨収入源となっている (Torres, 2001: 168)。国外のキューバ人は望郷の念と家族との絆のためキューバを訪問するが、未だに帰還できる見込みがない。経済制裁によって、国外からキューバへの送金手数料、電話料金、航空運賃、小包の運搬などは非常に割高だが、この通商に関わるのはほとんどが在米キューバ人である。筆者の調査では、こうしたサービスを利用する国内外のキューバ人から、自分たちは、キューバ政府だけでなく、米=キューバ二国の国交正常化に反対する在米キューバ人によっても搾取されている、という声を聞いた。つまり、国交正常化に強行に反対する在米キューバ人は、その理由に政治的理由をあげながらも、実は、経済的な利益のために主張しているのではないかと批判しているのである。困窮する家族のため、多くない収入から費用を捻出し、贈り物を携えてキューバに行かざるを得ない人びとと、その援助に頼らざ



るを得ない人びとが、憤ってそう語る様子を何度か目にした。

キューバ政府による、在米キューバ人の国民国家への再構成員化は、亡命し、カストロを厳しく非難したことで知られる小説家レイナルド・アレナスが、キューバ国内の大衆向け雑誌で紹介されることにも見て取れる。しかし、その雑誌記事では以下のように、亡命の意味を曖昧化するためにディアスポラという語が用いられている。「亡命、移住、ディアスポラ (*exilio, emigración y diáspora*) を区別せず用いる (略)。亡命という語に強い政治的含意があるのは明らかだが」(Capote Cruz, 2000: 53)。しかし同時に、アレナスの小説は、今でもキューバでは流通が許されていないことから分かるように、キューバ政府がその都合に沿うように、部分的に再構成員化しているに過ぎない。

以上のようなキューバ政府にとって都合のいい再構成員化は、自己を亡命者と見なす在外キューバ人には、容認できるものではない。これに対抗を試みるオ＝レイリ＝エセラは、自分自身も含めた、キューバの土地を踏んだことさえないキューバ人亡命者の子供たちをも、キューバの一員として「想起／再構成員化」(ReMember) することを提案する (O'Reilly Herrera, 2001: xxix)。それにとどまらず、キューバ本土で現政権に抑圧された人々をも亡命者と見なそうという (O'Reilly Herrera, 2001: xxxi)。彼女は、自ら編纂した在米キューバ人による数々の自伝的エッセイを集めたアンソロジー『キューバを想起／再構成員化する: ディアスポラの遺産』において、「文化的アイデンティティの構築と獲得のために意志が果たす役割を無視することはできない」とし、カストロによるキューバの支配に抵抗するという共通の意志によって、在外キューバ人との間の差異や、在外キューバ人とキューバ島のキューバ人との間の差異を、排除のために用いるのをやめようと呼びかける (O'Reilly Herrera, 2001: xxvii)。つまり、これまで革命初期に渡米した亡命者からは、マリエリートやバルセロとして排除されてきた人々や、いまでもキューバに住む人々であっても、反カストロという意志さえ共通であれば、亡命者として統合しようというのである。キューバ政府が在外キューバ人をトランスマイグラントのように国家を脱領土化して再構成員化しているのに対抗し、彼女も同じく国民国家を脱領土化している。逆に、キューバ在住のキューバ人を亡命者と見なし、在外キューバ人「ディアスポラ」の側に再構成員化しているのである。しかし、その構成からは、カストロ政権だけでなく、米国政府や在米キューバ人の政治にも批判的なキューバの人びとは抜け落ちてしまう。結果的に、彼女の使う「ディアスポラ」は、在米キューバ人の「亡命者」の伝統に沿った用法からあまり離れたところまでいかないのである。

以上のように、ディアスポラという語がキューバの文脈で用いられるとき、それまでの、移民か亡命者か、ネーションか移民か、という二者択一の表象の歴史が色濃く反映されている。つまり、それぞれの主張する内容は対立しているが、どちらも、自分たちの敵か味方かという視点でキューバ出身の人びとを二項対立的に分けている点では同じく寛容性に欠けるのである。

筆者がハバナの調査から得た知見では、米国ではなく、キューバ政府との関係が良好な国に渡って、在外生活を送ろうとする人は多い。その中には、キューバに戻らないという決意をもって出国

するのではなく、いつかはキューバに自由に往来できることを望みつつも、とりあえず、当面の生活のために出国を試みる人が少なくない。冒頭でベハーが述べたように、通常、キューバ人にとっては、キューバからの出国も帰国も困難だが、外国人との結婚や、芸術家として契約をして海外で仕事をするといった方法をとれば、帰国は格段に容易になる。こうした出国を希望する人びとは、キューバ国内の抑圧に抵抗を感じているのはもちろんだが、米国を筆頭とするキューバ外の政治的圧力にも閉口しており、キューバのように生活の隅々にまで干渉する「政治」から解放された生活がしたい、と語っていた。彼らは、少なくともハバナにいる間は、自らの出国を「亡命」とは位置づけず、行き先はどこでもいいからキューバを出てみたい、と表現していた。それは、「移民」が喚起するような、行き先に対する具体的な期待や希望を持った出国でもなければ、「亡命」が喚起するような、政治的な変革がなければ二度と帰らないという決断を伴った出国でもない。こうした曖昧な出国の動機や国外生活の様相をとらえるうえで、「移民」「亡命」という言葉では、意味が限定的すぎるのである<sup>9)</sup>。

## V 結語

ここまで、キューバ出身の国外生活者に対して「移民」「亡命者」という語を用いると、そこにキューバと米国の二国間関係に特有の、強い政治的な意味合いが負荷される様子を見てきた。しかし、冷戦後のキューバの位置づけの変化のなか、キューバを去る人びとのあり方も変容してきており、既存の概念から成る認識枠組みで現在の人的移動の様相を捉えるのには限界がある。例えば、亡命もしなければ、革命にもコミットせず、留学などでキューバ国外に出て様々な方法でそのモラトリアムの状況を引き延ばすような、「ディアスポラ作家」と呼ばれている作家などもある（野谷、2002: 11）。彼らのように、今日、キューバを出国するのは、渡航先にとどまる意志を持った人や、反カストロの意志を持った者だけに限られるわけではない。どのような動機であれ、キューバを出国し、国外で生活する人びとを「キューバ人ディアスポラ」と呼ぶことが可能になることによって、我々は、これまで見てきたような「移民か亡命者か」「革命家か反革命分子か」という政治的な二項対立を、いったんは宙づりにして、実生活の曖昧で複雑な経験に基づいたキューバの人的移動の様相をとらえられるようになるのである。この意味で、キューバをめぐる人的移動を表象する際に、ディアスポラの語を用いることは、新しい表象の可能性を切り開いたといえるだろう。

以上見てきたように、ディアスポラという語は、国内外のキューバ人によって、国外に生活の拠点をおくキューバ人を指すという一定の意味を共有しながらも、対立する意味をも付与され使用されている。本稿の諸事例が示すのは、ディアスポラのような新しい概念は別の視点を切り開くことはできるが、従来の概念を用いる際にあった表象をめぐる問題をすべて解決するわけではないということである。むしろここでは、新たな概念を自らの主張のよりどころに用いようとする論者たちによって、さらに異なる意味づけや、新たな対立が生み出されていることがわかる。とはいえ、新しい概念の導入は、使い古された言葉による表象が何を見落としてきたのかを明らかにし、認識の

枠組みを広げることが可能にする。そして、その概念を用いた分析が、以前なしえたよりも厚い記述を描くことに貢献するのなら、その概念は、生のジレンマのただ中に飛び込むことを通じた人類学的理解<sup>10)</sup>を新たにし、深めることを可能にしてくれたといえるのである。

## 謝辞

本稿は、日本民族学会第35回研究大会の口頭発表「移動の意味: キューバの事例より」に大幅な加筆修正を加えたものである。論文執筆にあたっては、大阪大学の小泉潤二先生、中川敏先生、春日直樹先生（現一橋大学）、栗本英世先生、成城大学の小田亮先生、一橋大学の杉高司氏から貴重なご指導、ご助言をいただいた。諸事情により執筆から出版まで時間がかかってしまったが、記して深い感謝の意を述べたい。

## 注

- 1) キューバでは「革命の勝利」(*El Triunfo de la Revolución*) と呼ばれる。本稿では煩雑さを避けるため、これを単に、革命と呼ぶことにする。
- 2) この点から、筆者は、ギルロイの持続的試みを評価したい (Gilroy, 1992; 1993)。
- 3) 在米キューバ人は、しばしば、キューバの現体制に対して共産主義という言葉を用いるが、キューバ本土では社会主義と認識されている
- 4) キューバの日常的分類では、肌の色が黒ければ黒人 (*negro/a*)、白ければ白人 (*blanco/a*)、中間となる明るさなら混血 (*mestizaje*) とされる。ただし、「人種」的区分には、肌色だけでなく、髪の毛の質、目鼻立ちや社会的地位なども考慮されるため、見る人によって判断が異なることが珍しくない (Fernandez, 1996: 27-32)。
- 5) それに対する批判として、(Castro, 2000: 303-304) を参照のこと。
- 6) 一方、キューバでは、マルティは先駆的に社会主義的理想を説いた国家的英雄とされる (Santi, 1986)。
- 7) 米国の軍事介入とキューバ占領によって終結した。
- 8) 米国のキューバ出身とメキシコ出身の移住者を比較した以下の研究を参照のこと。(Portes and Bach, 1985: 72-76; Pedraza-Bailey, 1985: 135-139)。
- 9) こうした青年たちがさまざまな国 (イギリス、スペイン、チリ、米国) へ渡った。筆者は数年後、彼らを移住先へ追い、ドキュメンタリー『Cuba Sentimental』(2010, 60分) にまとめた。そこでは、出国したことは後悔していないものの、その時点で住んでいる場所に居続けるべきかどうか迷い、逡巡する在外キューバ人の姿がある。2013年1月14日には、37年ぶりにキューバの移民法が改正され、出国・帰国の規制が緩和された。
- 10) Geertz (1973: 30)。引用部分の日本語訳については小泉潤二氏から教示を受けた。

参考文献

- アレナス、レイナルド 2001(1980)「自由の必要性」久野量一訳『ユリイカ: 詩と批評』9月号、pp. 105-109、青土社。
- Basch, L, N Glick Schiller & C Szanton Blanc(1994), *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation-States*, Gordon and Breach Science Publishers: Amsterdam.
- Behar, R (1993), *Translated Woman: Crossing the Border with Esperanza's Story*, Beacon Press: Boston.
- Behar, R (1996), *The Vulnerable Observer: Anthropology that Breaks your Heart*, Beacon Press: Boston.
- Bettinger-López, C (2000), *Cuban-Jewish Journeys: Searching for Identity, Home, and History in Miami*, The University of Tennessee Press: Knoxville.
- Capote Cruz, Z (2000), El Cuento Cubano del Exilio: Panorama de la década del Noventa, *Extramuros* 3, 50-53.
- Castro, M (2000), The Trouble with Collusion: Paradoxes of the Cuban-American Way, In *Cuba, the Elusive Nation: Interpretations of National Identity*, D. Fernandez & M.C. Betancourt(eds.), University Press of Florida: Gainesville, pp292-309.
- Clifford, James, *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*, Harvard University Press: Cambridge (=2002, 毛利嘉孝ほか訳, 『ルーツ: 20世紀後期の旅と翻訳』, 月曜社) .
- Croucher, S L (1997), *Imagining Miami: Ethnic Politics in a Postmodern World*, University Press of Virginia: Charlottesville and London.
- de la Campa, R (2000), *Cuba on My Mind: Journeys to a Severed Nation*, Verso: London and New York.
- del Aguila, J M (1998), Exiles or Immigrants? The Politics of National Identity, *CSA Occasional Paper Series* 3(2), University of Miami.
- Duany, J (2000), Reconstructing Cubanness: Changing Discourses of National Identity on the Island and in the Diaspora during the Twentieth Century, In *Cuba, the Elusive Nation*, D Fernandez & M C Betancourt(Eds.), University Press of Florida: Gainesville, pp17-42.
- Fagen, R, R Brody & T O'Leary (1968), *Cubans in Exile: Disaffection and the Revolution*, Stanford University Press: Stanford.
- Fernandez, N (1996), *Race, Romance, and Revolution: The Cultural Politics of Interracial Encounters in Cuba*, Ph.D Thesis, University of California, Berkeley.
- Ferrer, A (1999), *Insurgent Cuba: Race, Nation, and Revolution, 1868-1898*, The University of North Carolina Press: Chapel Hill.
- Fuentes, I (2001), Portrait of Wendy, At Fifty, With Bra, In *ReMembering Cuba: Legacy of a Diaspora*, Andrea O'Reilly Herrera(ed.), University of Texas Press: Austin, pp.58-63.
- García, M C (1996), *Havana USA: Cuban Exiles and Cuban Americans in South Florida, 1959-1994*, University of California Press: Berkeley, Los Angeles, London.
- Geertz, Clifford (1973), *Interpretation of Cultures: Selected Essays*. Basic Books. (=1987, 吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳『文化の解釈学 [1] [2]』, 岩波書店) .
- Gilroy, P (1992), *There Ain't No Black in the Union Jack*, Routledge: London.
- Gilroy, P (1993), *The Black Atlantic*, Harvard University Press: Cambridge.
- Goulbourne, Harry (2002), *Caribbean Transnational Experience*, Pluto Press: London.
- Guzman, Betsy (2001), *The Hispanic Population: Census 2000 Brief*, U.S. Census Bureau: Washington D.C., ([www.census.gov/prod/2001pubs/c2kbr01-3.pdf](http://www.census.gov/prod/2001pubs/c2kbr01-3.pdf)).

- Hall, Stuart, *The Formation of a Diasporic Intellectual: An Interview with Stuart Hall* by Kuan-Hsing Chen, Reprinted by permission of Routledge (=1998a, 小笠原博毅訳, 「あるディアスポラの知識人の形成」, 『現代思想: 3月臨時増刊スチュアート・ホール』, 6-30).
- Hall, Stuart, Cultural Identity and Diaspora, In *Identity, Community, Culture, Difference* (=1998b, 小笠原博毅訳, 「文化的アイデンティティとディアスポラ」, 『現代思想: 3月臨時増刊スチュアート・ホール』, 90-103).
- Helmreich, Stefan (1992), Kinship, Nation, and Paul Gilroy's Concept of Diaspora. In *Diaspora* 2(2), 243-248.
- Hufker, B and Cavender, G (1990), From Freedom Flotilla to America's Burden: The Social Construction of the Mariel Immigrants, *The Sociological Quarterly* 31(2), 321-335.
- 今福龍太 (1993), 『移り住む魂たち』, 中央公論社.
- 小泉潤二 (2002), 「民族の指導者リゴベルタ・メンチュ: デイヴィッド・ストルのメンチュ批判を考える」, 『民族の運動と指導者たち: 歴史のなかの人びと』, 山川出版社, 250-271.
- 工藤多香子 (1997), 「言説から立ち現れる『アフロキューバ』: フェルナンド・オルティスの文化論をめぐる考察」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』 54, 55-76.
- 共同通信社(編) (2003), 『世界年鑑』, 共同通信社.
- Levy, André (2000), Diasporas through Anthropological Lenses: Contexts of Postmodernity, *Diaspora* 9(1), 137-157.
- Malkki, L H (1995), Refugees and Exile: From "Refugee Studies" to the National Order of Things, *Annual Review of Anthropology* 24, 495-523.
- Martin, C & G Pérez (1998), *Familia, Emigracin, y Vida Cotidiana en Cuba*, Editora Poltica: La Habana.
- Martinez-Alier, V (1989(1974)), *Marriage, Class and Colour in Nineteenth-Century Cuba: A Study of Racial Attitudes and Sexual Values in a Slave Society*, The University of Michigan Press: Ann Arbor.
- Masud-Piloto, F (1996), *From Welcomed Exiles to Illegal Immigrants: Cuban Migration to the U.S., 1959-1995*, Rowman & Littlefield Publishers, Inc: Lanham.
- Naranjo Orovio, C (1987), *Cuba Vista por el Emigrante Español, 1900-1959*, Centro de Estudios Históricos: Madrid.
- 野谷文昭 (2002), 「移動・亡命・ディアスポラ: キューバの新しい世代」, 『國文学』 8月号, 47 (10), 6-11.
- Ong, Aihwa and Donald Nonini (1997), *Ungrounded Empires: The Cultural Politics of Modern Chinese Transnationalism*, Routledge: New York.
- O'Reilly Herrera, A (2001), Introduction. In *ReMembering Cuba: Legacy of a Diaspora*, A. O'Reilly Herrera(ed.), University of Texas Press: Austin, xvii-xxxiii.
- Ortner, Sherry (1996), Resistance and the Problem of Ethnographic Refusal, In *The Historic Turn in the Human Sciences*, MacDonald, Terrence(ed.), The University of Michigan Press: Ann Arbor, 281-304.
- Pedraza-Bailey, S (1985), *Political and Economic Migrants in America: Cubans and Mexicans*, University of Texas Press: Austin.
- Pérez-Firmat, G (1994), *Life on the Hyphen: The Cuban-American Way*, University of Texas Press: Austin.
- Pérez, L (1993), Cubans in the United States: The Paradoxes of Exile Culture, *Culturefront*, winter, New York Council for the Humanities.
- Pérez, L (1999), The End of Exile? A New Era in U.S. Immigration Policy Toward Cuba, In *Trends in International Migration and Immigration Policy in the Americas*, Max J Castro (ed.), North-South Center Press at the University of Miami: Coral Gables, 197-209.

- Pérez Jr., L (1995), Cubans in Tampa: From Exiles to Immigrants, 1892-1901, In *Essays on Cuban History: Historiography and Research*, University Press of Florida: Gainesville, 25-34.
- Portes, A (1969), Dilemmas of a Golden Exile: Integration of Cuban Refugee Families in Milwaukee, *American Sociological Review* August 34(4), 505-517.
- Portes, A (1984), The Rise of Ethnicity: Determinants of Ethnic Perceptions among Cuban Exiles in Miami, *American Sociological Review* 49 June, 383-397.
- Portes, A and R Bach (1985), *Latin Journey: Cuban and Mexican Immigrants in the United States*, University of California Press.
- Portes, A, J Clark & R Manning (1985), After Mariel: A Survey of the Resettlement Experiences of 1980 Cuban Refugees in Miami, *Cuban Studies* 15(2), 37-59.
- Poyo, G E (1989), *With All, and for the Good of All: The Emergence of Popular Nationalism in the Cuban Communities of the United States, 1848-1898*, Duke University Press: Durham, N.C. .
- Poyo, G E (1995), The Cuban Exile Tradition in the United States: Patterns of Political Development in the Nineteenth and Twentieth Centuries, In *Cuba: Cultura e Identidad Nacional*, Ediciones UNIÓN: La Habana, 76-98.
- Rieff, D (1993), *The Exile: Cuba in the Heart of Miami*, Simon and Schuster: New York.
- Safran, William (1991), Diasporas in Modern Societies: Myths of Homeland and Return, *Diaspora* 1(1), 83-99.
- Sandoval, M C (1979), Santeria as a Mental Health Care System: An Historical Overview, *Social Science and Medicine* 13B:2 April, 137-151.
- Sandoval, M C (1986), *Mariel and Cuban National Identity*, Editorial SIBI: Miami.
- Santí, E M (1986), José Martí and Cuban Revolution, *Cuban Studies* 16, 139-150.
- 鈴木慎一郎 (2000), 『レゲエ・トレイン：ディアスポラの響き』, 東京：青土社.
- 戴エイカ (1999), 『多文化主義とディアスポラ——Voices from San Francisco』, 東京：明石書店.
- Tambiah, Stanley (2000) , Transnational Movements, Diaspora, and Multiple Modernities: Transnational Movements of People and Their Implications, *DAEDALUS* 129(1), 163-194.
- Tölölian, K (1991), The Nation State and Its Others: In Lieu of a Preface, *Diaspora* 1(1), 3-7.
- Torres, M (2001), *In the Land of Mirrors: Cuban Exile Politics in the United States*, The University of Michigan Press: Ann Arbor.
- Villarroel, C & E Chávez(eds.)(1975), *Las Estadísticas Demográficas Cubanas*, Editorial de Ciencias Sociales: La Habana.

# Cuban Diaspora: On Representation of Cubans in the United States

Sachiko Tanuma

## **Abstract:**

In the Cuban context, the term “exile” was used by those who fled Cuba due to the Cuban Revolution of 1959. They were called exiles because many of the first to leave were from the upper strata of Cuban society, and did not willingly forsake their homeland to seek economic advancement, as is the case with most “immigrants” who came to the United States of America. They felt they were forced to leave because of the political chaos but believed that they would be able to return in due course.

As time passed and both the reasons why and the methods by which Cubans were leaving their country became more varied, it became increasingly problematic to use the term “exile” and/or “immigrant” when discussing Cuban migration. Hence, it is now appropriate to use the term “diaspora” in order to keep open the questions of whether they are determined to leave their homeland for good and what kind of political stance they take. This makes it possible to study and discuss the matter without getting into political debate and to gain fresh anthropological insight.

**Key words:** diaspora, immigrant, exile, Cuba, nation